

認識論的正当化における内在主義と外在主義について - バンジョーとソウザの討論を手がかりに -

岸 連

哲学的認識論において対立する二つの見解には、内在主義と外在主義がある。これらは知識の条件である「正当化」に関わるもので、正当化理由には主観的に利用できるものが必要であるとする立場を内在主義、主観的な要素にはこだわらず、実際に信頼できる方法で信念が形成されていることを重要視する立場を外在主義と定めることができる。現実社会における実用性の面では明らかに外在主義が有利と思える状況にあって、なぜ内在主義が外在主義の対立概念として存立していられるのだろうか。本論文では、二つの見解の対立関係を読み解きながら、内在主義が主張する内在主義的直観の重要性などについて考察を行った。

まず、内在主義と外在主義が現れるまでの過程として、伝統的な認識論についてまとめた。そして、『認識的正当化』における内在主義者ローレンス・バンジョーと外在主義者アーネスト・ソウザの討論をまとめることで、二つの見解の対立関係について考察した。この討論において、二人は共に、内在主義と外在主義は全く別の正当化概念であるという見解を示す。その上でバンジョーは、内在主義は認識論にとって不可欠であり、他の正当化概念に勝るものなのだと主張する。一方ソウザは、内在主義を鼻屑するバンジョーの見解を批判すると同時に、内在主義的直観を捉えるための新たな外在主義の理論を展開する。これらの主張を比較検討した結果、内在主義は理論として成立するには致命的な問題を抱えていること、それでも内在主義的直観は重要であること、ただしそれは外在主義では説明できないことなどが明らかになった。

これらのことをうけて、認識論が内在主義的直観を失わないために、内在主義を成立可能な新しいかたちに作り変える必要があると考えた。そのために、内在主義が致命的な問題を抱える原因となった遡行問題への対抗を、放棄すべきだということを提案する。そもそも遡行問題に対抗する必要性はないのであり、その放棄によって、内在主義にとっての致命的な問題を退けるとともに、内在主義という理論を現実の信念形成により近いものにすることができると思う。本論文においてその具体的な理論を示すことはないが、おそらくそのような内在主義は、これまでの基準を緩和することや、部分的に外在主義に依存することを必要とすると思われる。新しい内在主義は、それらのことを認めた上で、その理論を適切に運用できる範囲を定める必要があると考えられる。

(指導教員 横山幹子)